

光のあたるほうへ

寛祐

「 光のあたるほうへ」

鈴木幹也 (優柔不断、なんとなく生きてきたし、きつとこれからも)

関口太一 (幹也が部屋で見つけた日記の持ち主で、前に部屋を使っていた人物。ちょうど一ヶ月前に

バイトをやっていた。陽キヤ、地方出身、なんとなく都会に憧れ上京)

所長さん (温厚、いい人、工場を仕切っている一番偉い人)

寮母さん (人情味に溢れていそうな、面倒見のいい人)

父 鈴木昇 (幹也の父、堅実、計画性、真面目)

母 鈴木昌美 (幹也の母、教育熱心、世間体大事、ご近所さんの目、無難・安定路線)

兄 鈴木文俊 (幹也の兄、理想を持った現実主義者、エリート、努力第一、夢の為ならエンヤコラ)

ト書き

L・・・照明

M E・・・BGM等

S E・・・効果音等

## 0 場

幕が上がっていく。

舞台上は真つ暗で、その中に2人（幹也・関口）が立っている。

2人の周りには4つの箱（以下B B）が置いてある。

SE（冒頭）

幕が上がっていく途中から、2人に纏わりつくように周りからの雑音（色んな人の声）が聞こえてくる。声の途中から照明が入る。

L（シルエット）

声『結局は学歴だよ。上位大学を出て大手に就職しないと。中小なんて負け犬だぞ。』

声『なんでこんなことも出来ないんだ。いつまで掛かんだよ。ホント使えないな。お前なんて消えちまえ。』

声『凄じやない、やれば出来るのよ。期待してるわよ。立派な人になつてね。』

声『もつとちゃんと考えろよ。バカ。周りを見る周りを、頭悪すぎでしょ。』

声『考えすぎなんだよ、まずはやってみなきゃ何も始まんないだろ。』

声『適当過ぎ・・・。』

声『お前は悩みなさそうでうらやましいよ。』

声『空気読めよ、空気。』

L（薄く中央サス）

照明の中に関口・幹也が立っている。

色んな人の声は重なりながら2人を包み込み、次第に大きくなっていく。

わかつていることを繰り返す言われること。言わせてしまっている自分の現状。

どうしても抜け出せない自分の弱さ。

周囲の声に侵されて、2人の顔からは一切の感情が消えていく。

関口 7月21日。

幹也 8月21日。

関口 オレは考えることを止めた・・・。

幹也 僕は考えることを止め（た・・・）

関口 あ~~~~~

幹也 あ~~~~~

2人は絶叫しながら、発狂する。

2人の叫び声が重なりながら、舞台上は暗転する。

L（暗転）

2人退場する。

## 1 場 現代 東京駅の新幹線のホーム 7月31日 （0日目（移動日））

SE（新幹線のホーム）

L（新幹線のホーム）

幹也、舞台下手から登場する。

幹也はリゾートバイトに向かうため、大きな鞆を持って新幹線のホームにやってきた。

昔から乗り物好きで、特に新幹線が憧れだった幹也だが、都会育ちで両親ともに実家が首都圏だった

こともあり、ここまで新幹線に乗ったことがなかった。今回のリゾートバイトの目的の一つは新幹線に

乗れる（交通費は先方持ち）という点であり、幹也の中では大きな理由になっていた。

初めて歩く新幹線のホームは何もかもが新鮮であり、全てが輝いて見えた。

見えるもの、聞こえるものの全てを逃したくないと思う気持ちから、幹也の足は一向に進まず、

周りを行き交う人々とのスピードの差があまりにもはつきりとしている。

幹也はついに念願の新幹線と対面する。

幹也 わー。凄っ。え、凄っ。生新幹線・

幹也、憧れの新幹線との対面を果たし、感動に言葉も出ない。  
憧れだった新幹線は、幹也が思っていた以上の衝撃を与えた。ただただカッコよかった。  
幹也は荷物を下ろし、スマホで新幹線を撮ったり、一緒に自撮りをしたり、  
ホームの安全ライン越えて、線路を覗きに行ったりする。  
見るものすべてが憧れの新幹線のホーム。目がキラキラ、顔はニタニタ、すごく楽しんでいる。

幹也 #3号車12のB #7・45発 #7月31日 #人生初の新幹線を待つてる

#テンション上がりっぱなし

幹也、書き込みが終わるとスマホをポケットにしまう。

幹也 はあ。生きててよかった。新幹線・・・

L (語りっぽい雰囲気)

ME (テンポ感のあるBGM)

幹也、客席に向かって自己紹介を語り始める。

幹也、語りの途中からBBを移動させて、ファミレスの椅子の配置に転換する。

幹也 幹也、鈴木幹也。僕の名前。新幹線の幹の字に也(なる)で幹也。しつかりと地面に根を張り  
自らの力で立つ、そういう意味があるらしいのだけど、子供の頃の僕は、大好きな新幹線と  
同じ字だったことが只々嬉しかった。子供の頃からずっと憧れだった新幹線は、じいちゃんも  
ばあちゃんも、親戚みんな東京に住んでる、東京生まれで都会育ちの僕には乗る機会がなく、  
今日という今日まで妄想の中で乗る夢の乗り物だった。

L (ファミレス)

家族(父、母)入って来て、BBに座る。(机はない)

幹也、まだ立っている。

父 幹也、注文はまだ決まらないのか？

母 文俊が戻ってくるまでには決めなさいよ。

幹也 わかってるよ。

幹也 ミラノ風ドリア、ハンバーグステーキ、若鶏のグリル、タラコソースシシリー風、ミラノ風ドリア、  
ハンバーグステーキ、若鶏のグリル、タラコソースシシリー風、ミラノ風ドリア、ハンバーグステーキ、  
若鶏のグリル、タラコソースシシリー風・・・。

兄、入ってくる。

兄 もう注文した？(幹也を見て)まだ悩んでんのか？

幹也 いいだろ。

幹也、家族を一人ずつ紹介する。紹介された人は立ち、台詞を言って座る。

幹也 そしてこれがうちの家族。厳格な父。

父 アイラブ日経新聞&イタリアンハンバーグ。

幹也 教育熱心な母。

母 歯磨きは毎日朝昼晩、私はキャベツのペペロンチーノ。

幹也 出来のいい兄。

兄 男は黙って、リブステーキ&ラージライス。

幹也 そして僕、極平凡な家族の中、何不自由なく、平々凡々と暮らしてきた。

いつも家族で行くのはサイゼリヤ。そんな普通の家庭環境で、普通に勉強して、普通の高校に入り、  
そこでもやっぱり普通に勉強して、普通に大学も決めた。



あまり深く考えたこともないし、あまり焦ってもいない。なんとかなるんだろうと思っている。どうしても叶えたいものって、そういえば子供の頃からあまりなかった気がする。唯一あるとすれば・

L (新幹線のホーム)

SE (発車ベル)

ME (新幹線のホーム)

新幹線の発車のアナウンスとベルが流れ、シーンは再び新幹線のホームに切り替わる。

幹也は一人舞台前方(新幹線のホーム)へ移動し、家族はその間に退場する。

幹也 唯一あるとすれば新幹線。子供の頃からずっと憧れだった新幹線。

大人になる前には絶対に乗ってやるんだって思ってたけど、結局今日まで乗る機会はなかった。どうしても乗りたいって強く主張すれば乗らせてくれたかもしれないけど、今まで乗れてないってことは多分、そういうことなんだと思う。だから、地方出身の友達は都会生まれが羨ましいって言うけど、子供の頃から夏休みの里帰りの経験すらない僕からしたら、お盆や正月の帰省の度に新幹線に乗れるなんて喉から手が出るほど羨ましいことで、みんなは混んでるし退屈だって言うけど、それは乗り慣れた人だから言えることであって、僕からしたらそれはアイスのふたを舐めずに捨てるくらいの贅沢なことだと思う。

眩しすぎる兄のいる、鬱陶しい家から離れるため、憧れの帰省とはいかなかったけど、今日ついに念願の新幹線に乗れることになった。これだね。(タウンワークを取り出す)

SE (発車ベル)

幹也、話し終ると新幹線に乗り込む。

幹也の動きと共に暗転する。

L (暗転)

## 2場 宿舍 移動日 関口の日記を読みながらの回想

《関口の回想シーンと幹也が関口の日記を読む朗読とが交錯する》

ME (夜の音)

L (幹也の部屋(夏の暑さを感じさせる))

照明が入ってくる。

幹也、舞台下手へ、荷物を下ろす。

幹也はバイトの期間中に宿泊する部屋へ案内してもらい、荷物を降ろしたところである。

部屋は宿舍の一室で、この宿舍は実際に明日から働く工場の同じ敷地内に立っている。

今日は移動日(移動だけで半日かかった)で、実際に働くのは明日から。

そのため今日は部屋にまっすぐに案内してもらった。

宿舍の入り口には下駄箱があり、宿舍内はスリッパで生活する。

部屋は簡素な作りで、6畳一間。古いアパートのような作りで、一部屋ごとに鍵付きの扉がついている。

入り口から入ると、土間があり、そこでスリッパを脱ぐ。

入り口から見て反対側は窓になっており、割と大きな窓で、採光はとても良い。

窓を開けると、何も遮る物のない大自然が広がっており、とても開放感がある。

星空がとても綺麗に見える。入ってくる匂いも、とても良い。

部屋には冷蔵庫、電子レンジ、ポット、湯呑、机など、最低限必要そうな物は揃っている。

宿舍には食堂があり、朝昼晩の食事はそこで取るらしい。

宿舍の雰囲気は、地方にある古い民宿のような感じで、1階には自由に使っている洗濯機が

置いてあったり、窓が開けっ広げで風の通りが良かったり、廊下は薄汚れたゴムのようなフローリングだったり、田舎特有の開放感のような、決して綺麗ではないが、なんとなく懐かしいような雰囲気である。

サークルの合宿で泊まった海沿いの民宿を思い起こさせる。

幹也 ふぁ、疲れた。（窓開ける）うわゝ。（星）めっちゃ綺麗〜♪（はしゃぐ）  
やったなぁ。今日から独り暮らしだゝ

幹也は部屋の床に寝ころんで、あれこれ考えなければいけない現実（実家）から解放された実感が湧く。結局はただ逃げているだけだが、幹也にとってはようやく解放されたくらいにしか思えてはいない。寝ころんだ床の視線の先に、ノート（関口の日記）を見つける。

幹也 ん？

そのノートは幹也の物ではなく、恐らく、この部屋を前に使っていた人の忘れ物だろうと想像できた。ノートのようだが、何気なく捲ってみると途中まで書いてあり、内容の雰囲気から日記だとわかった。幹也は、なんとなく数ページ捲りながら読んでしまう。

幹也 6月30日。夏の期間だけ短期のバイトをしてみる。

マジで、自粛でバイトのシフト全部なくなったの痛過ぎた・・・。  
はぁ、シフト死ぬほど入った時の感覚でポチポチしてたのおわた・・・。  
大学休校で自宅警備し過ぎた。することないから仕方ない。仕方ない。これは仕方ない。  
お金もない。コロナで沖縄旅行中止になったから、代わりの旅行にする。  
ついでに稼げるし、それで割り切ろう。よくぞ見つけた、オレ。＃オレ、神クラス＃飼育家畜の餌やり＃住み込み＃時給割高。すぐ電話する！！

Ｌ（関口の日記）

関口、舞台上手から登場。旅行鞆を持っている。

関口も幹也と同様に新幹線でリゾートバイトにやってきた。

幹也が関口の日記を読むことで、過去の関口の行動が示される。

関口の日記を通して関口の生活が、幹也の生活と共に示されていく。

2人のバイト生活は、とても単調なものであり、2人のシーンは次第にシンクロしていく。ここでは、幹也が関口の日記を読む台詞に合わせて、舞台上で関口がマイムを合わせる。

幹也が読んでいるときはマイム、関口の台詞の部分は実際に関口が喋る。

幹也 朝6時から働いて夕方5時までらしい。家畜もずっと餌食べてるわけじゃないから  
実働2、3時間（笑）それで日当が10000円！！やばくない！？

関口 ってことで、急だけど、今日から来てって言われたからとりあえず1ヶ月いつてみる。

＃東京駅から新幹線♪＃久々の長旅＃人のお金で新幹線 マジ最高だろこれ。

関口、一度舞台上手へ退場し、幹也が日記を読むのに合わせて登場、舞台中央へ移動する。

幹也 やつと現地に到着。新幹線とローカルな電車と乗り継いで、山ん中のメチャクチャちっこい駅に着いたのが夜の8時。迎え来てもらった車でそこから2時間！！やばっ、2時間だぞ2時間！！  
どんだけ山奥なんじゃい。電車の乗り継ぎ迷って、ギリギリ乗ったけど、あれ失敗したら普通に最寄駅までも着かなかったつばい・・・。どんだけ田舎なんだよ。1時間に1本の電車って本当に存在すんのね（笑）神様、貴重な体験をありがとう。マジどんだけ遠いんだっの。  
けどそう考えると、出稼ぎって大変なんだな。

昔の人、マジリスペクト。偉いぞ昔の人！！

関口 昔の人、マジリスペクト。偉いぞ昔の人！！（重ねる）

所長、舞台下手後ろから登場する。

寮母、舞台上手後ろから登場する。

関口、舞台中央までいき、所長、寮母と対峙する。

関口の日記での、関口の回想が続く。

ここでは関口が実際にやり取りする回想シーンを、日記を読みながら幹也が眺める。

場面は関口が初めてこの部屋に連れてこられたシーンに。（幹也が部屋でくつろぐ前に受けた説明）

SE（蛍光灯の紐を引く音）

L（関口の日記）

所長が部屋の蛍光灯の紐を引くと、部屋の明かりがつく。

所長さんが基本的に関口の前に立ちながら、説明を始める。

寮母さんはやや控えめに後ろに立ち、関口に優しい眼差しを向けてくれている。

部屋の使い方の説明に関しては寮母さんから、実際の仕事に関しては所長さんから説明がある。

所長さんは使い込まれた作業着を着ているが、綺麗に洗われており、日頃から身嗜みには気を付けている様子。人柄も良さそうで、とても気さくそうな雰囲気である。

こんがりと焼けた腕や顔がいかにも一次産業従事者を感じさせ、裏表のなさそうな明るさを感じる。寮母さんはとても優しく、面倒見がいい雰囲気。余計なことは言わず、控えめではあるが、常に気を掛けてくれそうな優しさを感じる。

部屋の雰囲気に関しては同じ部屋なので、前述（6頁）の通りである。

関口、所長から建物の説明を受ける。

所長 ここが今日から泊まってもらう部屋になるから。そして、こちらが寮母の中村さん。

関口 あ、こんばんは。よろしくお願いします。

寮母 お疲れ様、遠かったでしょ。部屋にある備え付けのものは好きなように使ってかまわないからね。

関口 うす。

寮母 あと、お風呂は1階と離れにあつて、離れは露天風呂だから。

関口 露天風呂すか！？

寮母 空いてたらいつでも好きな時にどうぞ。

関口 よっしゃ。

所長 それで、仕事のことなだけどね。

関口 あ、はい。

所長 急遽来てもらったけど、いきなり明日から働いてもらっていいかな？

関口 はい。

所長 本心に申し訳ない。

関口 全然大丈夫です。

所長 この前までのバイトの子たちがまとめて早めに帰ってしまつて、人手が足りなくなつちやつてね。本当に応募してくれて助かったよ。詳しい話は明日また現場の方でするけど、仕事以外の時間は

自由だし、これまで来てくれてた子達も大体同じくらいの年の子ばかりだったから、すぐに慣れると思うよ。まあ、のんびり頑張つて。

関口 了解です。

寮母 何もない所で、若い人にはつまんないかもしれないけどね。空気はおいしくていいところだから。

所長 さちんと3食付くし、割のいいバイトだとは思ふんだ。中村さんの料理本当においしいから。

関口 バイト全然出来てなかったんでホント良かったつす。

寮母 毎日頑張つて作るからね。

関口 ありがとうございます。

所長 何か困つたことがあつたら中村さんに聞いて。じゃ、明日からよろしくね。

寮母 何かあつたら、管理人室にいるから。今日はゆっくり休んでね。はい、これ部屋の鍵。

関口 あ、了解です。

所長、寮母、舞台上手へ退場する。

L（関口の日記）

関口 なにここ。リゾートバイト初めて来たけど、こんな待遇いいの？てつきり大部屋だと思つてたのに、

ちゃんと個室だし。なにより離れに露天風呂あんのかよ！！やばくね（笑）

それにこの辺、田舎でなんにもないから、星とかキレイそ。満天の星を眺めながらの露天とかマジやばくね？くうくうくう、移動疲れたし、寝るか。（蛍光灯の紐を引っ張る）

幹也 『マジやばくね？くうくうくう、移動疲れたし、寝るか。（重ね）』（日記を閉じる）

SE（蛍光灯の紐を引く音）

L（幹也の部屋）



関口が部屋の蛍光灯の紐を引くと、照明が切り替わる。  
関口、舞台上手へ退場（日記の閉じるのに合わせて）する。  
幹也、日記を見ながら舞台中央へ移動する。

幹也 前にこの部屋使った人の忘れものだろうな。この人も東京からかあ。  
みんなタウンワークとかチェックしてんだな。リゾートバイト楽だっというから来てみたけど、  
どうなんだろ、仕事辛いのかなあ？ 続きに書いてあるっぽいなく、どーしよ。あゝ見てえ。  
見ちゃう？ 見ちゃいます？ いっちゃいます？ ついに犯罪犯しちゃいます？  
でももうちよつと見ちゃったしなあ・・・。今更か（笑）  
ああ気になるけど、見たいけど、見たくない気もする。見たら負けな気がする。  
でも、あゝ気になる。続き。よし、じゃあこうしよう。終わった日の日記は読んでよし。  
初日終わったら初日の分、2日目終わったら2日目の分は読んでよし。  
よし、そうしよう。そうだよそれがいいよ。そうと決まれば、よっしゃ、移動疲れたし。寝る。

SE（蛍光灯の紐を引く音）  
L（暗転）  
幹也が部屋の蛍光灯の紐を引くと、部屋の明かり消える。

### 3場 食堂く工場 （2日目朝）

ME（ちゅんちゅん、鳥のさえずり）  
SE（コケコッコー）  
暗転の中、寮母の声がする。

寮母 ご飯よ。  
幹也 はーい。

L（食堂）  
板付きで幹也と寮母。  
照明が入ってくる。  
場所は食堂で、朝ご飯の支度が整っている。  
長机の両側に椅子が並んでいるが、お膳が出ているのは幹也だけで、  
現在、この寮には幹也しかいないようである。  
必然的にバイトも幹也だけだと思われる。  
目の前に並んだ食事はわかりやすく一汁三菜。どれも寮母さんの手作りのようで美味しそう。  
幹也、朝ご飯を食べ始める。  
寮母さんは幹也の様子をみながら、水を汲んでくれたり気遣ってくれ、  
幹也の不安さを拭うように話し掛けてくれる。

幹也 いただきます。  
寮母 いよいよ、初仕事だね。すぐ慣れるとは思うけど、どう？ 緊張してる？  
幹也 はい、そうですね。  
寮母 そうよね。あ、食べ物は何が好き？  
幹也 ええと、そうですね・・・。  
寮母 何か嫌いなものはある？  
幹也 いや、特にないです。  
寮母 そう。じゃあうんと美味しいもの作って待ってるから頑張っておいで。  
幹也 はい、ありがとうございます。頑張ります。

幹也、食事を食べ終わると工場へ移動する。  
寮母、食堂の片付けをしつつ、退場する。

L（工場前）  
ME（朝の音）

幹也、荷物を運ぶ仕事のようにB Bを移動させて、工場の入り口（縦2段）に配置する。  
所長、登場する。  
場所が工場前に切り替わる。

幹也 （スマホでSNSにポストしながら）リゾートバイト初日。

所長 めちゃ楽しい・・・あれ？（圏外で送れず）

幹也 鈴木くん、携帯しまつてゝ。

所長 いやあ、仕事の内容を説明します。今日からこの建物の中で働いてもらいますが、この募集はタウンワーク見たのかな？

幹也 はい。

所長 で、仕事なんだけど募集に書いてあったように、ここで育ててる家畜への餌やりになります。朝・昼・夕の一日3回。決まった時間に餌をやってもらうと。まあ簡単に言うとそのだけです。

幹也 え、それだけですか？

所長 そう、それだけなの。まあそれだけなんだけど、本当に簡単な作業なんだけど、餌の袋が多少重いから、それが最初はきついかな。あとは作業中は必ず手袋着用、作業の前に確実にアルコールで消毒ね。消毒液は入り口とか餌代の脇とか必要な場所にはきちんと置いてあるので忘れないでね。

幹也 はい。ちなみに重いってどれくらいですか？あんまり体力には自信ないんですけど・・・  
所長 体力自信ない？そっかあ。まあでもね、大体いつもバイトの子達は2、3日で慣れてるから大丈夫だと思うよ。そんなに筋肉隆々の子達ばかりでもなかったし。

なんだかんだで、こういうのは慣れだから。大丈夫よ。  
あと、もう一個注意点なんだけど。うちの動物、かなりデリケートで光に弱いから、

この建物の中に入ったら光は厳禁ね。すっかり忘れて携帯とか持つて入っちゃう子がたまにいるんだけど、一回それで大量死滅させちゃったことがあって、

今は電子機器類の持ち込みも禁止になってるから。くれぐれも、そこはきちんと守ってください

幹也 何を飼ってるんですか？

所長 気になるよね。あんまりはつきりは言えないんだけど、光に弱い生物なんだって思ってる。

この研究が実用化されたら、うちの専売特許になるから。その時までには秘密でお願いします。  
SNS投稿も禁止だからね。

幹也 あ、はい。

所長 だから、工場の中は真っ暗です。仕事中也ね。

幹也 え？じゃあどうやって餌やるんですか？

所長 まあ真っ暗ってゆっても薄暗い感じなんだけどね。けどまあ結局は慣れになっちゃう。

幹也 慣れ・・・

所長 大丈夫大丈夫。本当にみんな最初は同じような不安な顔して始めるんだから。じゃあ、やってみようか。はい、まずは手袋して。

所長、幹也に使い捨てのゴム手袋を渡し、自分も手袋をする。

幹也、所長に渡された手袋をする。

所長 そしたら次は消毒。

2人、消毒をする。

所長 じゃあ、それ持つて。

幹也 はい。

幹也は所長に言われた大きな袋を持ち、所長と一緒に建物（工場）の入口へ向かう。

工場の扉は、鉄工場などにあるような二重扉で引き戸タイプの鉄扉になっており、両手を使ってしっかりと開けないと簡単には開かない扉である。

今回は所長が一緒だったため、所長が開けてくれたが、一人の作業の場合はいちいち荷物を置く必要があるらしかった。

所長 扉は二重になってるから。ちゃんと一つずつ開け閉めするんだよ。  
幹也 はい。

光が入らないように、扉は一つずつ開けなければならぬように、一人の作業のときには荷物をその都度その都度何度も下す必要があることに、幹也はめんどくささを感じながら工場の中へ入っていった。

L (工場の中)

2人は工場の中へ移動する。

工場の中は、説明があつた通り、暗い。

目が慣れてくれば、多少はぼんやり見えるかもしれないが、慣れたとしてもはっきりとは見えないだろうと感じられる。

この暗さの中で本当に作業が出来るのか不安になるが、所長は慣れた雰囲気で作業の説明を続ける。

所長 じゃあ餌の袋はその辺に置いて。

幹也 はい。

所長 そしたら、またここで手指消毒。

幹也 はい。

2人、手指を消毒する。

幹也は、暗さの中、かなり手探りだが、所長は慣れた様子。

所長 そしたら、まずこうやって袋の口開けて。開けたら、中にほら餌が入ってるから。

所長、大きな袋の口を慣れた手つきで開けると、中から餌を取り出して餌のやり方を指導する。手前にいる動物と、奥にいる動物それぞれに行き渡るように餌を与える。

所長 この餌をこうやって、餌の袋からこつちの手前の餌台へ置いてあげる。

(意外と単純作業。左から右に送るだけのような) こうやって手前は置いてあげる。

で、奥にもいるから、奥の方の動物たちには下からこうやって(床に転がす)食べ食べうって転がしてあげて。じゃあ、やってみて。

幹也、言われたように餌をやってみるが、暗さに目が慣れていない上、作業にも慣れていないので餌を落したり、餌の袋に躓いたり悪戦苦闘する。

所長はバイトの子が最初はいつも同じように悪戦苦闘することをわかってるので、いつものこととニコニコしながら見守っている。

所長 手前には、

幹也 置く。

所長 違う違う違う。手前と奥はやり方が違うからこつちやにしないで。

幹也 え？あ、はい。

所長 手前の餌代には置いてあげる。奥には転がす。わかった？

幹也 はい。

所長 やってみて。手前は、

幹也 置く、

所長 うーん、違うな。

幹也 え？

所長 奥は？

幹也 転がす、

所長 置くのと転がすのは違うからね！！ まあ徐々に覚えてね。はい、続けて。

幹也 こうですか？(左から右に送るだけのような)

所長 うーん、ちよつと硬いなあ。もっと楽にシンプルに。

所長、合図する。  
ME（燃えよドラゴン）

所長 考えるな、感じる。

しばらく音に合わせてやってみる。

幹也 こうですか？

所長 そう。

幹也 こう。

所長 そうそう。

幹也 こう？

所長 上手い上手い。その調子。

幹也 あと、奥の方にもいるからそういうのはこうやって（ボーリングのように転がす） 食え食えくって。

所長 食え食えく（ボーリングのように餌を転がす）

幹也 食え。

所長 食えく、ちょ（幹也に促し）

2人 チョコボールく。

所長 いいねえノリが。よし、じゃあ今日はここまでにしよう。

所長、幹也を促して工場を出る。

工場から出るときも、二重扉に気を付けながら、一つずつ開け閉めしながら外へ出る。  
真っ暗な工場内で作業をしていたため、外の光がかなり眩しく感じられる。

ME（夕方の音）

L（工場前）

幹也 眩し。

所長、手袋を外し、幹也の手袋も預かり、ゴミ入りに捨てたりしながら。

所長 眩しいよね。はい、お疲れ様でした。どう？慣れない仕事は疲れたでしょ？

幹也 そうですね。全然上手いかなかったです。

所長 大丈夫大丈夫。みんなそうだから。

幹也 はい。

所長 全然上手くやってた方だよ。

幹也 そうなんですか。

所長 まあ今日は露天風呂でも入って、しっかり疲れとってもらって。

ゆつくり休んだら、また明日頑張ろう。

明日からは基本鈴木君にやってもらうことになるからね。

幹也 大丈夫ですかね？

所長 大丈夫よ。何かあったらオレもいるし、難しい作業はなかったでしょ？

幹也 はい・・・。

所長 大丈夫だって。あ、でも手指消毒とか注意点は必ず忘れずにね。

生き物相手だから、そこは忘れずに。

幹也 わかりました。

所長 まあすぐに慣れるから。ファイトファイト。じゃ、お疲れ様。

幹也 お疲れ様です。

所長、舞台上手へ退場する。

幹也は疲れた体でとぼとぼと宿舎（舞台の中央）へ移動する。

## 4場 宿舍 部屋の中 (2日目夕方)

SE (蛍光灯を引く音)

L (幹也の部屋)

幹也が部屋の蛍光灯の紐を引くと、照明が切り替わって、部屋の明かりになる。

幹也 ふう、初日終了。腕パンパン……。慣れる慣れるっていうけど、めちやくちやしんどいじゃないかぁ……。大丈夫大丈夫って、こんなん本当に慣れんのかよ……。

幹也、置いてあった日記を開く。

日記が開くのに合わせて、関口が舞台上手から登場する。

関口の登場に合わせて、照明が切り替わる。

L (関口の日記)

関口が舞台上手側前で喋っているのを、幹也は日記を読みながら眺めている。

幹也は関口(日記)に対して、たまにつっこむ。

関口 初日終了。結論から言うと、超当たりなバイト。所長さんもめっちゃいい人だし、

コンビニで950円もらってレジ打ってるよか、100倍マシ。

幹也 あれで当たりなんだ。

関口 飼ってるものは商品化するまで言えないらしいんだけど、光に弱いデリケートなやつらしい。

光も無理ってどんだけデリケートなんだよっ！オレか？笑

幹也 薄々気づいてたけど……。こいつ割と陽キャ？はあ陽キャかあ。陽キャもマメに日記とか

書くんだな……。

関口 飼ってるトコはバツと見たただの工場だから、本当こんなトコで飼育してんのかよって思ったけど、

中では結構な数、飼育してるらしい。大きくなったら出荷するみたいだけど、俺らはしばらく

餌やりだけやつてればいいみたい。だから、今のところ、俺の仕事はと言うと、一日3回、

決まった時間に工場行つて餌やるだけ。餌がちよつと重いんだけど、ドッグフードの大きい袋

みたいなのを1回に30袋運び込んで、その封を切つて餌台に入れるだけ。(マイム)

超単純作業(笑)まー見事にいきなり筋肉痛になったけど……。慣れたらちよー楽だと思う。

多分、1週間後には名人と呼ばれてるね。(マイム)この仕事、神だ。最高すぎる。

まあ、しいていうなら光入ってこないから、暗くてなんもみえないからやりづらい……。

ほぼ手探り(笑)お陰で2回ほど袋をぶちまけちゃった(笑)

幹也 オレもやった(笑)

関口 みんな最初はそんなもんらしいし、まあそのうち慣れると思うけど。さあて。

袖から寮母の声がする。

寮母 ご飯よ。

幹也 はい。

幹也、日記を閉じる。それに合わせて関口退場する。

幹也は日記を置きに立ち上がる。

幹也が日記を置くと、照明が切り替わり、場面が食堂に切り替わる。

L (食堂)

寮母、入ってきて幹也に座るように促す。

寮母は幹也の前に晩御飯を並べていく。

幹也 わあ。

寮母 朝好きな物言ってくれなかったじゃない？何が好きだかわからなかったから

ハンバーグにしてみたんだけど。

幹也 大好きです。

寮母 ホント？良かった♪どんどん食べて♪

幹也 はい。いただきます。

幹也 が食べ始める。

久し振りの重労働でご飯がとても美味しく感じられる。  
夢中になってご飯を食べる。

寮母は前に座って、美味しそうに食べる幹也を見ている。

バイトの初日は慣れない作業で疲労感を強く感じている子が多いため、  
何気ない会話や、バイトでの話をしながら、労うようにしている。

また、周りに娯楽もなく、バイト期間中は宿舍が唯一といえる程の憩いの場であるので、  
なるべく過ごしやすく、快適に、ストレスのからない環境を整えてあげて心掛けています。

今回は幹也一人のため、なるべく幹也のリクエストなどを聴きながら、  
食事のメニューや宿舍での環境を考えていきたいと思っています。

寮母 今日一日疲れたでしょ？初日の感想は？どうだった？

幹也 思ってたより、重労働でした。餌やりもやっぱ、暗くて上手く出来なくて。難しかったです。

寮母 そうねえ。でも、みんな初日はそう言ってるから（笑）ホントそんな顔して（笑）

幹也 そうなんですか？

寮母 そうよお。だけど、みんなすぐに慣れちゃって。何日かしたらもう自慢ばかり（笑）

「おばさん、今日最速出したよ」って。若い人って本当に飲み込みが早いから。

幹也 はい。

寮母 食べたなら、露天風呂行っておいで。ゆっくりするといいわ。

幹也 はい。

幹也、食べ終わる。

幹也 御馳走様でした。

寮母 はい、お粗末様でした。

幹也、寮母に片付けをお願いして、露天風呂に行くことにする。

幹也、舞台下手へ退場する。

寮母、料理を片付けて退場する。

## 5場 露天風呂 （2日目夜）

ME（露天風呂）

L（露天風呂）

照明が切り替わる。

関口、舞台上手から登場する。

幹也、舞台下手から登場する。

寮の離れにある露天風呂。施設は人里離れた山の中、周りには明るい建物など何もない。

満天の星空の下、こじんまりとした、しかしとても開放的な露天風呂である。

こじんまりとしたサイズ感が逆にちょうど良い。

音も人工的な音は何もなく、ただ自然に包まれている。

この環境が心を開かせるのか、とても素直な気持ちになれる気がする。

誰もいない、この静かな露天風呂が2人にとっての癒しの場であり、自分に正直になれる場所である。

露天風呂は2人の素直な気持ちを吐露させる。

2人は同時に存在している存在ではないが、露天風呂に並んで座り、

同時に存在しているわけではないが、

互いの独り言がやがて会話をしているようなやり取りになっていく。

関口 ふう、露天マジやばいわ。疲れた。  
幹也 月デカいな。まわりに明るいものないから星すんごいなあ。  
関口 久々にこんなに星みたな。はあ、めっちゃいいバイト。

幹也 餌やりなんてオレに出来るのになって思ったけど、案外やれば出来るもんだね。

必要とされてる感じもして気分もいいし。

関口 けど、やっぱ気になるわあ。

幹也 やっぱ？

関口 気にしなきゃ全然問題ないけどさ、真っ暗な中で鳴き声聞くと怖い(笑)

幹也 あれ怖いよね。たまにうめくみたいのに鳴いてて、暗いからなにが起きてんのかわかんなくて

ホントに怖い・・・。

関口 作業すぐ終わるから気にしなきゃいいんだけどさ。

幹也 いや、気になるでしょ。しかし、相当光に弱いんだろうなあ。

関口 扉とか2重だし、窓ないし。一回光に当ててみたいわ(笑)

幹也 どーなるんだろ。

関口 こっそり写メ撮ってみよっかな。

幹也 マジで？

関口 ようし、そのうちやってみよ♪

幹也 楽しみ。

2人 よーし、明日もいっちゃ頑張るか。さてと、上がるっかな。

暗転する。

L(暗転)

## 6場 工場 (バイト3日目〜6日目)

ME(ウィリアムテル)

朝焼けの照明が入ってくる。

関口、幹也、舞台上下から登場する。

照明はやがて工場になっていき、夕方になり、夜になる。

照明の変化と音の変化によって時間の経過を見せる。

L(朝〜工場〜夕方〜食堂〜部屋〜就寝〜朝〜の繰り返し)

2人は日々の繰り返しの中の生活を端的に表す(照明と音と行動で時間経過を見せる)

2人は仕事に段々慣れてきて、動きがスムーズになっていく。

作業が効率良くなっていく、仕事がどんどんこなせていくことに喜びを感じ、

仕事に対してどんどん楽しさを感じていく。

2人の日常生活に、所長、寮母も良いタイミングで、良い感じに関与し、日々の生活が刻々と進んでいることを表す。

(バイト3日目)

SE(コケコッコー)

起きる(移動)

働く(移動)

食べる(移動)

寝る

(4日目)

SE(コケコッコー)

起きる(移動)

働く(移動)

食べる(移動)

寝る

(5日目)

SE (コケコッコー)

起きる (移動)

働く (移動)

食べる (移動)

寝る

(6日目)

SE (コケコッコー)

起きる (移動)

関口・幹也、淡々と働いている。

所長、舞台上手から登場 (二重扉をきちんと使って工場に入ってくる) する。

所長 どう？もうずいぶん慣れたでしょ？

2人 (手を止めて) そうですね、大分慣れました。

所長 ああ、ごめんごめん続けてて。

2人 あ、はい。

所長 いやあ、本当に来てくれて助かったよ。しばらく続けられるんでしょ？

2人 そうですね、出来れば1ヶ月くらいは。

所長 実はさ、次に頼んでる子達がちよつと日程ズレ込みそうだね……。仕事も丁寧だし、言ったことをきちんとやってくれるから本当に助かる。出来ればもっと長くいて欲しいけど。まあでも1ヶ月でも本当に助かるから。本当にありがとね。じゃあ、頑張つて。

2人 はい。

所長、舞台上手奥へ退場 (二重扉をきちんと使って工場から出ていく) する。

2人しばらく作業をしたのち、工場から出て、宿舎へ帰る。

照明が切り替わって、食堂になる。

L (食堂)

2人、別れる。

幹也は食堂に移動、関口は舞台下手前へ移動 (関口は日記を書く) する。

寮母、舞台上手前から登場し、座った幹也に晩御飯を並べていく。

寮母 はい、今日もお疲れ様。 (ご飯をよそう)

幹也 疲れたよ。

寮母 どう？仕事は慣れた？

幹也 うん、なんとか。

所長、舞台上手から登場し、幹也の隣に座る。

所長 たまには、一緒に食べよつかな。いい？

幹也 え？あ、はい。

所長 中村さん、今日オレここで食べるね。

寮母 はいはい、今準備しますね。

所長 ごめんね。

寮母 いえいえ。

寮母、所長の晩御飯も準備を始める。

所長 どう？何か困ったこととかある？

幹也 いえ、大丈夫です。

所長 そつかそつか。もう就活は進んでるんだっけ？

幹也 うーん、まあ。

所長 なんだか怪しいなあ (笑)



寮母 何するの？

幹也 まだはつきりと決まってはなくて。

所長 何かやりたいこととかないの？

幹也 なんとなくはあるんですけどね。

所長 ダメだよなんとなくじゃ。自分の将来なんだからしつかり考えなきゃ。

幹也 まあ、そうなんですよね。（水を取りに立つ（関口と入れ替わる））

幹也と関口、入れ替わる。

幹也は関口が書いていた日記を読む。

寮母 まあまあ、所長さんも落ち着いて。

所長 関口くんは関口くんであってることがあるんですから。ねっ（関口に）

所長 あ、ごめんごめん。まあそうだよ。オレがこんなこと言わなくても考えてるか。

関口 ごめん口うるさいこと言ったね。許してちょんまげ（笑）

寮母 いえ、大丈夫です。でも本当に考えなきゃですよ。

関口 露天もう空いてるから、食べ終わったら行っておいで。

寮母 ありがとおばさん。じゃあ行ってこよっかな。ご馳走様。

幹也、日記を閉じる。それに合わせて関口は舞台上手へ退場する。

幹也、日記を置き、舞台下手へ退場する。

所長、退場する。

寮母、片付けたら舞台上手へ退場する。

## 7場 露天風呂 （バイト6日目夜）

ME（露天風呂）

L（露天風呂）

照明が切り替わり、露天風呂になる。

関口、舞台上手から登場する。

露天風呂に入る。

関口 もはや仕事には慣れた。マジ最近の俺は名人を超えて機械だわ（笑）あまりにも単純作業過ぎて、

余計なことばっか考えてる。・・・やりたいことなんもなくて、とりあえず大学入って、

上京してきたけど、やつば都会の生活に憧れてただけなのかなあ。

歩くのも、喋るのも何もかも、みんな早くて、色んなものが溢れてて、

何でも選びたい放題なんだけど、自分で必要なもの選んだり、

自分でほしいもの選んだりしてるつもりでいるだけで、

本当に自分で選んでいるのかはよくわかんない。

今まで選んできたものは、結局まわりに流されて選んだだけだったんじゃないかな。

これが自分で選んだ人生だったのかなあ。こんなことがやりたかったのかな。

幹也、台詞の途中で舞台下手から登場する。

露天風呂に入る。

2人は同時に存在するわけではないが、互いの独り言がやがて会話のやり取りの様になっていく。

幹也 やりたいことってなんなんだろう？なんの為に僕は存在してるんだろ？

生まれてきたことにはみんな意味があるっていうけど、僕は何をするために生まれてきたんだろ？

ただなんとなく生きてるけど、僕が生きてる意味ってなんなんだろう？

関口 （ここから2人交互に歌う）何のために生まれて、

幹也 何をして生きるのか。

関口 答えられないなんて、

幹也 そんなのは嫌だ。

関口 答えられる奴なんているのかな？

幹也 よくわかんない。けど別に思いつめてるわけでもないし。

関口 こんな柄じゃないのに、多分、露天が気持ちよすぎるせいだ（笑）違う違う。今の俺はこんなキャラじゃねえ。お疲れです。

幹也 答えが出ないこと考えたって仕方ないよね。なんも考えないでここまで来たんだし。

関口 僕はひたすら機械にでもなんでもなってる（笑）

幹也 行っちゃおう？

関口 よくし、待ってる動物たちよ♪乞うご期待。

関口、舞台上手へ退場する。

幹也 やっぱそうなるよね。

幹也、舞台下手へ退場する。

## 8場 宿舎外 （バイト6日目夜）

ME（夜の音）

L（宿舎外）

照明が切り替わって、宿舎外になる。

寮から工場への道には街灯など一つもなく、暗がり広がっている。

幹也、舞台下手から登場、片手にはスマホを持っている。

仕事にも慣れてきた幹也は、段々と余裕が生まれ始め、余計なことを考えるような時間が出来てしまった。折角、現実から逃れられていたのに、余裕が出来たことで、また現実が直面し始めてしまった。そして露天風呂はそんな自分をストレートにダイレクトに感じさせた。モヤモヤした気分を晴らすため、ほんの軽いノリで、ダメなこととはわかっていながらも、

工場に動物の写真を撮りに向かっている。

寮から工場への道は街灯など一つもないため、月明かりを頼りに歩くしかない。

幹也の手に持ったスマホからは画面の灯りが漏れていて、

暗がりの中、スマホの画面がぼんやりと明るい。

幹也、周りを確認しながら舞台中央へ移動する。

所長、舞台下手から登場、舞台中央へ移動する。

所長、幹也に声を掛ける。

所長 鈴木君、そんなところで何やってるんだい？そっちは露天風呂じゃないよ。

幹也 あっ、（スマホを隠す。所長を確認してから）こんばんは所長さん。ちょっと迷ってしまつて。

所長 暗いから気をつけなさいよ。しょうがない、連れてったげるよ。

幹也 え？悪いからいいですよ。

所長 いいからいいから。さあ、こっちこっち。

幹也 はい・・・。

所長 もう、本当におつちよこちよいなんだからあ。心配だよ・・・。

幹也、言い訳をするが自分がやろうとしていたことに後ろめたさもあり、上手く会話にならなかった。正当な理由があるわけでもないのに、所長に逆らえるはずもなく、所長に連れられていく。

2人、舞台下手へ退場する。

関口、舞台上手から登場する。

関口 外に出てみたんだけど、いきなり所長さんに見つかった・・・。こっそり出ただけだな・・・。

幹也、舞台下手から日記を持って登場し、日記を読みながら喋っている関口を見ている。

関口 そっち露天じゃないよって。しくった。次こそ絶対写真撮ってやる。

関口、舞台上手へ退場する。

幹也 やっぱそっちも無理だったんだ。

幹也、舞台下手へ退場する。

暗転する。

L (暗転)

## 9場 工場 (バイト7日目朝々夕方)

L (朝々工場)

照明が入ってくる。

関口・幹也、舞台上下手から登場し、工場へ移動する。

2人は悶々とした気持ちを抱えつつ、変わらない毎日を繰り返している。

そんな生活にそろそろ飽きてきているし、余裕のある今は余計なことしか浮かばない。

2人はいつもと同じ作業を繰り返している。

照明と音と行動で時間経過を見せる。

関口 バイト7日目終了。さて。

L (工場々夕方)

関口・幹也、仕事を終えて工場から外へ移動する。(きちんと二重扉を使用する)

L (夕方、工場外)

2人、工場から出ると外は夕暮れになっている。いつもの光景で何も変わり映えはしない。

これから宿舎に戻れば、晩御飯の用意があり、ご飯を食べたら露天風呂へ浸かり、

そこでグダグダとどうにもならないことを考えたら、部屋に戻って寝る。

そしたら、また次の日がやってきて、工場で働き、宿舎に戻り昼食を食べ、午後の仕事をこなしたら、

また、今この場所と同じこの場所で、同じ景色を見ることになる。

毎日が同じことの繰り返しで、正直嫌気が差してきている。

2人、悶々とした気持ちを抱えつつ、宿舎に帰ろうとする。

所長、舞台上手から登場し、2人に声を掛ける。

2人は同時には存在しないが、所長とのやり取りは1人を相手しているように進んでいく。

所長 どこ行くの？

幹也 え？宿舎に戻ろうかと。

所長 迷うといけないから送るよ。

関口 大丈夫ですよ。

所長 ほら、行くよ。おつちよこちよいだから心配でしようがないよ。

暗がりです。暗がりでケガとかしちやったら大変だしさ。

2人 はい・・・。

3人が移動し、宿舎に着くところで、寮母が舞台上手から登場する。

所長 じゃあ中村さんお願いね。

所長、舞台下手へ退場する。

照明が食堂に切り替わる。

L (食堂)

寮母は2人を座らせ、いつものように食事の準備を始める。

2人は同時には存在しないが、寮母とのやり取りは1人を相手しているように進んでいく。

2人は食事をしながら寮母と会話する。

寮母 お疲れ様。

幹也 お疲れ様です。

寮母 昨日迷って、外、出歩いてたらしいじゃない。この辺は夜になると真っ暗なんだから危ないわよ。

関口 露天に行く途中で迷ってしまった。

寮母 危ないから、今日から露天風呂は禁止。

2人 え？

寮母 仕事終わったら外はもう暗いでしょ？また迷ったら危ないから、これから毎日所長さんに

送ってもらうように頼んどいたから。

幹也 なんだ？

寮母 暗くて危ないんだから。帰ってきたら、外に出ちゃダメよ。

関口 大丈夫ですよ。

寮母 なに言ってるの、何かあってからじゃ遅いんだから。わかったら、ご飯食べて、ゆっくり休んで。

2人 はい・・・。

寮母、言い終わると話をするでもなく2人を残して舞台上手へ退場する。

関口・幹也、寮母から突然露天風呂使用禁止を言い渡され、逆らうことも出来ず少し放心する。

唯一の癒しの時間とも言えた露天風呂が禁止になれば、益々、することがなくなる。

時間を使える場所もなくなり、益々時間を持て余してしまうことは明らかで、益々憂鬱な気持ちになる。

2人、軽く呆然としながら食事を食べる。

暗転する。

L (暗転)

## 10場 工場 (バイト8日目～11日目)

ME (ウィリアムテル)

2人は仕事に段々慣れてきて、動きがスムーズになっていく。

作業が効率良くなっていく、仕事がどんどんこなせていくことに喜びを感じ、仕事に対して

どんどん楽しさを感じていく。

2人の日常生活に、所長、寮母も適切なタイミングで、適度に関与し、日々の生活が刻々と進んでいることを表す。

工場の照明がつく。

L (工場)

ME (変わらない日々)

関口・幹也、板付き (舞台中央)

照明はやがて夕方になっていき、夜になり、暗転 (就寝)、朝の繰り返し。

照明の変化と音の変化によって時間の経過を見せる。

L (工場く夕方く食堂く部屋く就寝く朝く の繰り返し)

2人は日々の繰り返しの中の生活を端的に表す。(照明と音と行動で時間経過を見せる)

こっそり外に出た次の日から、所長さんによって常に行動が監視されているような気がする。

工場での仕事の中に気付けば目が合うことが増えた。

工場から宿舎への行き帰りも所長さんの送迎が付くようになった。

途中寄り道したり、遠回りしたりすることも出来ない。少し散歩することも出来ない。

完全に向上と宿舎の往復のみになってしまった。

自由を奪われた生活にどんどん息が詰まっていく。

(バイト8日目)

働く

食べる

(9日目)

SE (コケコッコー)

働く

食べる

(10日目)

SE (コケコッコー)

働く

食べる

(11日目) (照明で時間経過をみせる)

SE (コケコッコー)

2人はマイム(日常生活)を続けながら独り言を言い始める。

関口 楽なバイトだし、おいしいとは思うけど、圈外だし、何もすることがない・・・。

幹也 そもそも周りにはなんもないし、露天風呂くらいしか楽しみがなかったのに、

関口 それさえ、奪われた今となつては、

幹也 どうやって時間潰すか、そればかり考えてる。

ME (時計)

時計の秒針の音がはっきりと聞こえる。

時間の流れがとて遅く感じ、同じことをただ繰り返しているだけの生活に対して、生きていく実感を見出せなくなり始めている。

どうやって時間を潰すのかばかり考えているが、時間があつという間に過ぎてしまうほどに熱中出来るものも見つからず、時間を持て余している。

余計なことばかり考えてしまう。

関口 俺、昨日はひとりかくれんぼした。

幹也 オレはずっと数数えてた。

幹也 時間が足りないってゆってる人よく聞くけど、そんなに欲しいなら売ってあげたい。

関口 時は金なりっていうし、ちよつと売れるだけでも楽に稼げんのに・・・。

幹也 明日もどうせ同じことの繰り返しなんだろうな・・・。

2人、鬱々とした気持ちをどんどん膨らませながら、毎日の仕事だけはこなしていく。

作業効率はピークから比べれば低いものの、一定水準で維持されている。

暗転する。

L (暗転)

## 11場 (バイト12日夜)

工場の照明がつく。

L (工場)

関口・幹也、板付きで、作業をしている。

2人は日々の繰り返しの中の生活を端的に表す。(照明と音と行動で時間経過を見せる)

もはや、鬱々とした感情は抑えられず、限界を感じている。

作業も最初の頃のような丁寧さや効率的な作業ではなくなり、

毎回、ただこなすだけの作業になってしまっている。

餌やりをする中で感じたことも、ストレスとしてどんどん溜まってきている。

この鬱々とした日常に何か変化を与えるため、

一度は失敗した動物の写真撮影をリベンジすることにした。

2人は働き終わった後、食堂で夕食を済ませると再び工場へ向かう。

手にはスマホを持ち、暗がりの中、工場へ向かっている。  
働き終って、工場から出てくる辺りから台詞を話し始めて、2人が扉を開けようとするときまでには、  
食事と再び工場へ向かう部分の動作が終わっているようにする。（「早く出荷されちゃえば  
いいのに」の部分で扉を開けたいので、それまでに再び工場へ戻ってきてほしい）

幹也 12日目終了。

関口 案の定、今日も昨日と同じ一日だった。

幹也 今日は餌やったら腕舐められた。

関口 あんま考えたらご飯まじくなるから気にしないようにしてたけど、実際気持ち悪い。

幹也 生暖かくて、舌がざらざらしてて。

関口 舐められて湿った私の腕に鼻息がかかってひんやりした。

幹也 何度も何度も舐めるから、何度も何度も殴ってやったら気持ち悪い声で鳴いてた・・・。

2人 早く出荷されちゃえばいいのに。早く出荷されちゃえばいいのに。

2人、再び工場へ戻ってきて、扉の前に立つ。

2人、扉を開けようとする。

2人が扉を開けようすると同時に、所長が舞台下手から登場し、話し掛ける。

優しいと思っていた所長だが、徐々に2人を恫喝し始め、2人はどんどんと追い詰められていく。

所長の理詰めの話の展開に、逆らうことも出来ず、ただ言われるがまま土下座をさせられてしまう。

所長 何やってるんだい？

幹也 うわっ。

関口 所長さん。ど、どうもこんばんは。（スマホを隠す）

所長 まさか、また迷った？

幹也 とは言わないよねえ。そんなところで何やってるんだい？

関口 いやあ、今日は迷った、わけではないんですけど・・・。

幹也 ほ、ほら、毎日餌をやってるものですから、じ、情が移ったといえますか、夜寂しくないかなとか、

幹也 し、心配になっちゃいまして。

所長 そっか。

幹也 で、心配だからなにしてたの？

所長 それは、

幹也 なにしてたんだい？

関口 だから、それはですね、

所長 なにしてたんだ！

幹也 工場に入って、様子をみ、みようと。

所長 あれ、最初に言わなかったっけ？うちで飼育してる動物はデリケートだって。

関口 ・・・・

所長 あれ、言わなかったっけ？

幹也 ・・・・

所長 おいおい、いい歳して口も利けねえのか？それとも頭悪すぎて理解できねえのか？

幹也 日本語わかる？日本語。

幹也 それは、言い過（ぎです）

所長 あ？

所長 なんだよ、言いたいことあるなら言ってみろよ。

関口 ・・・・

所長 ほら、言わない。これだからゆとり世代は嫌なんだよ。勝手に口出してきて、

幹也 聞いてやったら答えない。まともな会話になんねえよなあ。

所長 ちゃんと日本語習ってきたのか？え？おいおい、なんか言ってみろよ。おい、おい！

幹也 ・・・・

所長 だから、答えろつってんだろ？。なんか言いたかったんだろ？言い訳したかったんだろ？

関口 ・・・・

所長 なんだよ、言わねえのかよ。

幹也 ……  
所長 言えねえくせに口答えしようとしてくんじゃねえよ。自分の意思もねえくせに余計な言い訳考えやがって。

幹也 すみません・  
所長 何も考えずに、言われたことにすぐ答えりやいいんだよ。もっかい言ってやるな。最初に言わなかったつけ？うちで飼育してる動物はデリケートだって！！

関口 言いました・…。  
所長 は？聞こえねえよ。

幹也 言いました・…。  
所長 大きい声でしゃべれ、大きい声で。

所長、当り散らす。

関口 言いました。

所長 言いましたじゃねえだろ、言われましただろうがよ！！  
幹也 言われました。

所長 だから、聞こえねえつつてんだろうがよ。

関口 言われました。  
所長 じゃあ、わかってたんだよなあ？それとも、デリケートの意味がわかんなかったのか？

幹也 ……  
所長 だから、答えろつつてんだろが！！

関口 わかってました・…。  
所長 次から、すぐ答えなかったらそこに正座な。

関口 ……  
所長 聞こえてなかったのかデメエ。すぐ答えろつつたら！！

幹也 はい。  
所長 正座だ正座。

関口 ……  
所長 だから、聞こえねえのか。ゆとり世代は耳までゆとりなのか。

関口 違います・…。  
所長 口答えしてんじゃねえよ。正座だつつてんだろうがよ。

関口・幹也、少し弁解しようとも思うが、所長の勢いに押され逆らうことが出来ず正座する。

幹也 ぼ、僕は・…。

寮母、舞台上手から登場する。

寮母は2人の様子をみて、声を掛ける。

2人は寮母に助けを求め、なんとか所長に弁解させてもらおうとするが、優しかった寮母の反応が徐々に変わっていき、寮母からも叱責を受ける。

2人はどんどん追い詰められていく。

寮母 まあなにやってるの？

所長 ああ中村さん。

寮母 どうしたの？こんな地べたに正座なんかしちゃって・…。大丈夫？ちよつと所長さんやり過ぎなんじゃないの？

幹也 聞いてください、おばさん。

寮母 ン？

関口 ちよつと息抜きがしたかっただけなんです。

寮母 ちよつと外の空気が吸いたくて、フラッと出ちゃっただけなんです。

関口 別に動物に何かしようとしたわけでも、所長さんに迷惑をかけようとしたわけでもないんです。僕、最近ずつと悩んでて、それで息が詰まってたっていうか、

寮母 うん。  
それで、気付いたらフラッと外に出てただけなんです。  
わざとじゃないんです。

寮母 うん。

寮母 お願います。

寮母 おばさんからも、

寮母 ん？私からも？今私からもって言った？私から何するの？

寮母 え？だからおばさんからもオレがそんな迷惑をかけるつもりじゃなかったって・  
迷惑をかけるつもりじゃなかった？え？もう迷惑掛かってるじゃない。

寮母 そうですけど・

寮母 じゃあなに、あなたが掛けた迷惑を、私が尻拭いしなきゃいけないってこと？

寮母 そういうつもりじゃ・

寮母 なんて？

寮母 え？

寮母 なんて？

寮母 いえ、だから・

寮母 なんて、私があんたの尻拭いしなきゃいけないのよ。

寮母 何？黙って聞いてりや調子に乗りやがってよ。

寮母 息が詰まるってなに。あんなに環境整えてやってんのに、まだ足りないの？ん？

寮母 それとも、私が寮母じや息が詰まるって言いたいのか？え？そういうこと？

寮母 え、おばさん？

寮母 ちゃんと3食食事も用意してやっただろ？

寮母 洗濯物だって全部やってやってんじやん。

寮母 何が不満なの？好きな物すら言わねえくせに。

寮母 何の役にも立たないあんたは言われたこと黙ってやってりやいいんだよ。

寮母 言われたことやってりや、ご飯食べさせてもらえんじやん。それでいいじやん。

寮母 大体、あんたに何かできることでもあんの？ないんだろ？

寮母 そんなあんたにこっちは文句も言わずに、飯作ってやってんだろ？

寮母 掃除してやってんだろ？

寮母 なんて、おばさん、どうしちゃったんすか？

寮母 何？あんた寮母だと思ってるんでしょ。

寮母 おばさん？

寮母 おい。おばさんおばさん、うるせえな。私にも名前があんのよ。

寮母 あんたにおばさん呼ばわりされる筋合いはないんだよ。

寮母 大体さあ、お前が撒いた種なんだろ？

寮母 言っただけな。

寮母 一回宿舎に戻ったら、外に出るなって。

寮母 は、はい。でも、だから・

寮母 言い訳すんなよ。言っただろ出るなって。

寮母 そうだけど・

寮母 そうだけど？なんでお前はタメ口なんだよ。こっちは年上だろうが。

寮母 すみません。だけど・

寮母 すみませんじゃねえんだよ。あ？ で、だけど何なんだよ。言っただろ？外に出るなって。

寮母 言われたこと破って、出歩いて、見つかったら、助けてくださいって？

寮母 おいおい調子良過ぎるだろ。

寮母 そんな甘い話あるかよ。それともなんだ？

寮母 寮母なんて自分の言うことは何でも聞くと思ってるのか？

寮母 だから、寮母に言われたことは守らなくていいってか。

寮母 なめてんじゃねえぞ。人を馬鹿にするのもいい加減にしろ、寮母だって思ってなめやがって。

寮母 私のことなめてんだろ？あ？なあ私のことなめてんだろ

寮母 そんな・。

寮母 あんたさあ、約束は守れて、習わなかったんだね。

寮母 子供の頃に親から言われなかったか？約束は守れて。



関口  
寮母

・・・。  
そうか、言われなかったんだ。お前の親はとんでもない親だな。  
自分の子に、そんな当たり前のことも教えられなかったんだからな。どうしようもないくそ親だ。  
だからこんな、どうしようもない奴が存在するんだ。

はあ。お前、なんの為に存在してるんだ？  
なんの役にも立たないくせに、人に迷惑はかける、約束も守れない。  
終わってんね。ゴミじゃん。世の中のゴミ。

何の為に存在してるの？なんの役にも立たないんだから、何も考えないで  
言われたことやったりやいのよ。それすら出来ないなら、生まれてこなきゃよかったじゃん。

何も役に立たないあんたは家畜以下。

何？言いたいことがあるなら言ってみなさいよ。

ぼ、僕は・（お、俺は・）

ぼ、僕は・（お、俺は・）

早く言えよ！！

・・・。

いいか、普段意思なんて持たねえ奴がいちいち意思持つんじゃねえよ。

言われたばっかだろ、何の役にもたたねえテメエは家畜以下なんだよ。

余計なこと考えないで言われたことやったりやいんだ。

もう一回だけ挽回のチャンスをやる。

言われたことに『はいはい』答えりやいいんだよ。

楽だろそのほうが。考えんのなんて、その程度で充分だろテメエなんて。

いいか、お前はもう『はい』だけ答えろ。ああ、まあいいや、『いいえ』も言わせてやる。

『はい』か『いいえ』だけ言え。

はい。

テメエはうちの動物がデリケートだってわかってて、わざわざこんな夜中に

様子を見に来たんだな？

はい。

うちの動物が全部死んだら、テメエで全部責任とってくれるんだな？

・・・。

答えろつつてんだろ。

いいえ。

責任も取れねえくせに余計なことしようとしたってことだよな？

はい。

自分じゃ正しい判断ができないってことだよな？

い・

判断できないってことだよなあ？

・・・。

そうだろうが！！

はい。

じゃあ、お前はもう何も考えなくていい。全部オレが決めてやる。

何も考えず、言われたことをやってろ。

はい。

何も考えるんじゃねえぞ。

はい。

心配すんなって、どうせ、今までだってそうだったんだろ？

はい。

自分で決めたことなんてないんだろ？

はい。

じゃあ、今までと大して変わらないじゃないか。

はい。

オレが全部決めてやるんだ。

（2人  
はい）

寮母 ラッキーだったじゃん。

2人 はい。

所長 家畜以下になんないようにせいぜい役に立て。

所長・寮母、2人を残して舞台上下へ退場する。

関口・幹也、放心状態のまま取り残される。

頭の中をグルグルと色んな思いが回りはするが、はっきりとは考えられない。

暗転する。

L (暗転)

## 12場 工場 (バイト18日目〜21日目)

L (工場)

工場の照明がつく。

関口・幹也、板付き。

2人は場所を移動せず、所長と寮母が2人に関与しに移動することで、場面を転換していく。

関口・幹也、働いているが無表情で、もはや、機械のように感じられるほど無機質。

何も考えず、ただ淡々と作業をこなしていく。

所長、舞台下手から登場(二重扉をきちんと使って工場に入ってくる)、声を掛ける。

所長 どう？順調？

2人 (働きながら返事をするが、無表情) はい。

所長 本当に来てくれて助かったよ。

2人 はい。

所長 ずっと、ここにいてくれないかなあ？

2人 はい。

所長 助かるよ。こんなに頑張ってくれる子なんて中々いないからね。

2人 はい。

所長、2人の作業を確認すると工場を後にして(二重扉をきちんと使って工場から出ていく)、

舞台下手へ退場する。

2人はしばらく作業を続けている。

寮母、舞台上手から登場する。

L (食堂)

場面は食堂に切り替わる。

寮母は2人の前に食事を準備する。

寮母 はい、今日もお疲れ様(ご飯をよそう)

2人 はい。

寮母 どう？仕事は順調？

2人 はい。

寮母 明日からも頑張つて。

2人 はい。

寮母、2人が食べている様子を暫く見たのち、2人を残して舞台上手へ退場する。

2人は無表情でご飯を食べている。

フェイドで暗転する。

L (暗転)

(19日目)

SE (コケコッコー (鈍い))

L (無機質な明るさ (時間経過を表す))

照明がつく。

ME（無機質な透明感）

関口・幹也、板付き。

2人の動作と照明で時間経過を表す。

2人は働きながら、独り言を呟き始める。

幹也 毎日決められた時間に餌を与えている。

関口 毎日毎日、同じ時間に餌をやるだけ。

幹也 餌をやっている時は、機械にでもなったような気分になる。

関口 生きてる意味とか考えてたけど、本当に何の為に生きてるんだろうって思う。

幹也 答えが出ないことを考えてるくらいならいっそ機械になったほうがまだ気楽なんだろうな。

関口 なにも考えなくていいし。

幹也 なにも感じないし。

関口 機械になれない以上、生きてる間は、こうしてずっと考えてしまうのだろうか、  
幹也 何も考えなくて済むにはどうしたらいいのだろうか。

2人、しばらく働いたのち、工場から食堂へ移動する。

2人、食事を食べている。

フェイドで暗転する。

L（暗転）

（20日目）

SE（コケコッコー（鈍い））

L（無機質な明るさ（時間経過を表す））

照明がつく。

関口・幹也、板付き。

2人の動作と照明で時間経過を表す。

2人、働いている。

ME（無機質な透明感）

2人は働きながら独り言を呟き始める。

幹也 だんだんとわからなくなってきた。

関口 自分が聞いている音が本当に聞こえている音なのか。

幹也 自分が見ている景色が本当に見えている景色なのか。

関口 生きている実感はいつからかすでない。

幹也 息はしている。

関口 鼓動は聞こえる。

2人、しばらく働いたあと、食堂に移動し、食事を食べている。

フェイドで暗転する。

L（暗転）

（21日目）

SE（コケコッコー（鈍い））

L（まばゆいほどの透明感、無機質（時間経過を表す））

照明がつく。

関口・幹也、板付き。

2人の動作と照明で時間経過を表す。

2人、働いている。（関口は途中まで）

ME（無機質な透明感）

2人は働きながら、独り言を呟き始める。

幹也 自分が生きてるのかどうかわからなくなってきた。  
関口 いや、そんなことすら考えていることがめんどくさい。

幹也 なにも考えなくて済むのなら。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 所長さんの言うとおりだ。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 今までの人生、自分で決めたことなんてなかった。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 自分は誰かに生かされてきたんだ。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 オレとここで飼ってる家畜とどれだけの差がある？

関口 思考なんて必要ない。

幹也 与えられたもので生かされてるなら、

関口 思考なんて必要ない。

幹也 差なんてないじゃないか。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 オレも家畜も大差ない。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 オレも家畜も大差ないんだ。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 そうなんだ、

関口 思考なんて必要ない。

幹也 何も考えず与えられているオレは。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 飼いなされた家畜と同じなんだ。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 考えることをやめたお前は。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 家畜だ。

関口 思考なんて必要ない。

幹也 さあ食えよ。(関口に餌を与える、関口餌を食べる)

幹也は持っていた餌を足元に転がして、関口に与える。

関口はしゃがんで四つん這いになり、幹也が転がした足元の餌を食べ始める。

声が降ってくる。

その声は2人を包み、2人の思考を導いていく。

段々と声に身を委ね始めていく。

声に重ねて、関口は台詞を繰り返す。

声『思考なんて必要ない。』(関口) 思考なんて必要ない。

声『今までずっと流されてきたんだろ。』(関口) 思考なんて必要ない。

声『これから先もずっと流されて生きていくんだろ？』(関口) 思考なんて必要ない。

声『何も考えなければ辛いことも苦しむこともない。』(関口) 思考なんて必要ない。

声『何も考えなくていいんだ。』(関口) 思考なんて必要ない。

声『何も感じなくなってるんだろ？』(関口) 思考なんて必要ない。

声『何も怖がらなくていい。』(関口) 思考なんて必要ない。

声『思考なんて必要ない。』(関口) 思考なんて必要ない。

声『思考なんて必要ない。』(関口) 思考なんて必要ない。

声『思考なんて必要ない。』(関口) 思考なんて必要ない。

幹也 考えることをやめれば、僕は・・・。

幹也 思考なんて必要ない。

2人同時に

関口 7月21日。

幹也 8月21日。

関口 オレは考えることを止めた・・・。

幹也 僕は考えることを・

関口、幹也の腕を何度も何度も舐める。

幹也は舐められた腕から関口を振り払い、何度も何度も殴りつける。

何度も殴りつける中で、家畜を殴りつけたときの感覚（舐められた時の）を思い出す。

いつか舐められて気持ち悪くて殴りつけた家畜（12日目）は日記の人物だったのかもしれない。  
幹也は感情を取り戻す。

幹也 う、うわあ。やめろ、舐めるな。やめろ、気持ち悪い。来るな、来んなよ。

工場のスピーカーから放送が入る。

声『さあ出荷だ。出てこい。』

工場の扉が開き、出口から光が射し込んでくる。光はちょうど道のように見える。

L（やたら眩しい、出口へと続く道のように）

関口、射し込んでくる光に導かれるように、光の方向へ自ら進んでいく。

関口、出荷される。（退場する）

幹也は我に返り、感情を取り戻したことで、はっきりと状況が理解できた。

しかし、恐怖、不安などから、足が動かない。

この場からなんとか逃げ出したいが、声の導きは強く、負けそうになりながらなんとか抗う。

幹也 え？いやだ、いやだ。嫌だ。僕は行かない。僕はそっちへはいかない。ダメだ、力が入らない。

嫌だ、そっちへは行かない。行きたくない、行きたくない。僕は人間だ。家畜なんかじゃない。

僕のことを勝手に決めないでくれ。僕のはほつといてくれ。僕にかまわないでくれ。

声『今更遅いんだよ、今まで流されてきたんだろ？』

幹也 いやだ、ダメだ。そっちへは行きたくない。行きたくないんだ。

声『これからもずっと流されていくんだろ？』

幹也 嫌だつてゆつてるだろ。いやだ、嫌だ。僕はそっちへは行きたくない。頼む、お願いだ、

お願いします。僕はそっちへは行きたくありません。僕はそっちへは行きたくありません。

声『なにも考えなくていいんだ。なにも怖がらなくていい。』

幹也 嫌だ、嫌だ。

声『こつちの世界には何も怖いことなんてないんだ。さあ、ほら。』

幹也 嫌だ、嫌だつて言ってるだろ。

声『思考なんて必要ない』（繰り返し 徐々に人数を増やす）

幹也 い、嫌だ、行きたくない、やめろ、行かない。僕はそっちへは行きたくない。嫌だ、行かない、

行きたくないつつてんだろ。嫌だ、嫌だ、やめろ、僕はそっちへは行きたくない。

やめろ、やめろ、嫌だつて言ってるだろ。ふざけんな、勝手に決めんなよ。

行かないつて言ってるだろ。行かないつて言ってるだろ。僕は家畜じゃない。僕は家畜じゃない。

勝手に決めつけんな、僕は家畜じゃない。僕は行かないからな。僕は行かないからな。

ふざけんな、ふざけんな、ふざけんな、ふざけんな。僕は家畜じゃない。残念だったな、

僕は行かないんだ、ざまあみる。僕は自分の意志があるんだ。僕は自分の意志があるんだ。

僕は自分で考えられるんだ。僕は、僕は考えることを止めない。

あ~~~~~

幹也の叫びをきっかけとして、場面が切り替わり、冒頭のファミレスの場面に戻る。  
L（ファミレス）

家族が出てくる。

家族、冒頭のファミレスの並びで座る。

幹也、立ったまま。

父 幹也、どうした？大丈夫か？

母 そんなに焦らなくてもいいのよ。

幹也

いいや。僕は決めた。自分で決断したんだ。もう迷わない。  
兄ちゃんにもお父さんにもお母さんにも、誰にも決めさせない。

これは僕の人生なんだ。僕が決めたきやいけないんだ。

今まで自分で決断できなかったのは、きっと、責任から逃げたかったからなんだ。

人に決めてもらえば、人のせいに出来るから。だから、自分で決断したくなかったただけなんだ。

でも、もう僕は逃げない。自分の決断には自分で責任を取る。僕は決めたんだ

僕は、僕はミラノ風ドリアにする！！

SE（サイゼリヤ）

ME（ED）

母が呼び鈴を押し、ファミレスの呼び出し音が鳴る。

SE（呼び出し音）

家族が楽しそうに話している。

明るいまま幕が下りていく。